

## 話し手の印象に及ぼす方言と参加者の出身地の影響

新見直子

(広島文教女子大学)

丸目 祐

(医療法人さこだ歯科医院)

本研究では、話し手の使用する3つの言語スタイル（共通語、広島方言、鹿児島方言）と実験参加者の出身地が話し手の印象に及ぼす影響を検討した。さらに、実験参加者のもつ方言意識と話し手の印象の関連性についても検討した。主な結果は次の通りであった。(1) 共通語話者は方言話者よりも知的な印象を与える傾向にあった。(2) 出身地の言語スタイルは共通語や他の方言よりも好意的な印象を形成する傾向にある。

(3) 日常的に方言を使用する傾向にある者ほど、本実験で提示された話し手を知的で、人柄がよいと評定する傾向にある。

**キーワード**：方言の使用、参加者の出身地、方言意識、話し手の印象

### 問 題

話し手の印象に影響を与える要因は種々あるが、話し手の使用することばの影響は比較的大きいと考えられる。例えば、敬語を多用する話し手に対しては、礼儀正しいという印象をもったり、堅苦しいという印象をもったりする。また、郷里を離れて大学に進学した学生には、郷里の方言で話す相手に対して親しみを感じる者も多いだろう。話し手の使用することばに注目した海外の研究では、ある地域で主要に使用されていることば（方言など）と標準的なことばで話す話し手の印象を比較検討している。このような研究では、一貫して知的な側面や社会的地位に関する評定値は方言話者よりも標準的なことばの話者で高く、逆に親しみやすさや対人的魅力に関する評定値は標準的なことばの話者よりも方言話者で高く評定されている（町・樋口・深田, 2006）。

わが国においても、話し手の方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響について検討されている。例えば、岡本（2001）は、名古屋市在住の大学生を対象に、共通語と名古屋方言を話す同一人物の音声を録音し、実験参加者にそれぞれの音声を聞かせて話し手の印象評定を求めている。話し手の印象を比較検討した結果、共通語で話した場合には知性や積極性を高く、名古屋方言で話した場合には社交性を高く評定することが報告されている。また、東京大学の学生を対象に、共通語と大阪方言の話し手それぞれの印象を比較した渡辺・唐沢（2013）の研究でも同様の結果が示されている。すなわち、共通語で話した場合には知性得点が高く、若者を中心にコミュニケーションのツールとして使用される傾向のある大阪方言（渡辺・唐沢, 2013）で話した場合には「社交的な」や「親しみやすい」などの項目から構成される温かさ得点が高かった。わが国においても海外の研究と同様、共通語話者に対しては知的な印象をもち、居住する地域で話されている方言や耳にすることの

多い方言の話者に対しては親しみやすい印象をもつ傾向にあると考えられる。ただし、岡本（2001）と渡辺・唐沢（2013）の研究では、使用した方言を使用する地域の出身か否かによって話し手の印象評定に違いがみられるかどうかについても検討しているが、いずれの研究でも有意差は見出されなかった。

ところで、方言を使用すれば常に相手に親しみやすいという印象を与えるとは限らない。例えば、初対面の相手にいきなり方言で話しかけることが相手に好ましくない印象を与える可能性もある。つまり、状況や相手によって、方言で話すことが相手に親しみを感じさせる場合もあれば、逆に好ましくない印象を与える場合もありうる。町他（2006）は、広島県と香川県の学生を対象に、状況や話題によることばの使い分け（コードスイッチ code-switching）に着目した研究を行っている。話し手の使用する言語スタイル（共通語、広島方言）と発話場面（共通語の使用が適切な場面、方言の使用が適切な場面）を組み合わせる次の4つの条件を構成し、話し手の印象評定を求めている。設定された条件は、場面に応じた言語スタイルの切り替えを行う条件（CS条件）、一貫して共通語を使用する条件（共通語条件）、一貫して方言を使用する条件（方言条件）、場面に一致しない不適切な言語スタイルの切り替えを行う条件（RCS条件）の4つであった。そして、設定した条件と参加者の出身地（18歳まで広島県内に居住し外住歴のないネイティブ、18歳まで広島県内の居住歴のないノンネイティブ）を要因として話し手の印象を比較検討している。その結果、知性得点は共通語条件で最も高く、次いでCS条件で高く、方言条件とRCS条件で低かった。それに対して、人柄のよさ、社交性、対人魅力の3得点は、方言条件とCS条件が共通語条件やRCS条件よりも高かった。さらに、ネイティブの社交性と対人魅力の2得点ではCS条件と方言条件が他の条件よりも高く、ノンネイティブでは対人魅力得点でCS条件が共通語条件よりも高かった。町他（2006）の結果から、一貫して共通語を使用する場合には知的な印象を与え、一貫して方言を使う場合や状況に合わせて方言を使用する場合には社会的な印象を与えるといえよう。

以上のように、わが国の研究においても海外の研究においても、共通語話者と方言話者に対して形成される印象についてほぼ一貫した結果が得られている。それに対して、出身地等による違いはほとんど見出されていない。日本の方言は、主に地域差を反映する地理的な方言であることから（町他, 2006）、話し手の印象に出身地による違いが見出される可能性が高いと考えられる。しかし、上述した3つの研究（町他, 2006; 岡本, 2001; 渡辺・唐沢, 2013）では出身地による顕著な違いが見出されなかった。その理由として、これらの先行研究で使用している方言が実験参加者にとって出身地の言語と同様に馴染みのある言語であったことが挙げられる。田中・前田（2012）によると、岡本（2001）や町他（2006）の研究の実験参加者が居住する東海地方や中国・四国地方の者、および渡辺・唐沢（2013）で使用されている大阪方言が主に使用される関西地方の者は、聞き手が同郷出身者であっても異郷出身者であってもその地方の方言を使用する者が相対的に多い。つまり、少なくとも岡本（2001）と渡辺・唐沢（2013）では実験に使用された方言が実験参加者にとって日常的に耳にすることの多いことばであったので、実験参加者の出身地によって印象に違いがみられなかった可能性が考えられる。さらに、先行研究では実験参加者の出身地を刺激として提示された方言を主に使用する地域出身者とそれ以外の地域出身者に大別したことが関係している可能性も考えられ

る。町他（2006）のノンネイティブのように提示される方言を主に話す地域出身者ではなくても、地理的に近い地域の出身者であれば提示された方言を聞く可能性も相対的に高くなるだろう。

そこで本研究では、使用する方言を実験参加者の居住する地域で主に使用されている方言とその地域で使用される可能性の低い方言の2種類を使用し、提示する方言の使用される出身者が否かによって出身地を分類することにした。この2種類の方言と共通語を使用して検討した場合、先行研究（町他, 2006; 岡本, 2001; 渡辺・唐沢, 2013）を参考にすると、以下のような3つの結果が得られると予想される。①共通語話者は、いずれの方言話者よりも知的な印象の評定値が高い。②居住する地域で使用されている方言の話者に対しては、出身地に関わらず、共通語話者よりも社交性や親しみやすさに関する評定値が高い。③居住する地域で使用される可能性の低い方言話者に対しては、その方言を使用しない地域出身者よりもその方言を使用する地域出身者において社交性や親しみやすさに関する評定値が高い。これらの予想を確かめることを本研究の第1の目的とする。本研究では、広島県に居住する大学生を対象にするので、主に使用されている方言として広島方言を使用することにした。一方、広島県内で使用される可能性が低い方言として鹿児島方言を取り上げることにした。その理由は、以下の2点である。第1に、本実験参加者に九州地方の出身者が含まれる可能性が高いことである。第2に、鹿児島を含む南九州の大学生に生育地の方言を出すまいと意識する傾向がある（田中・前田, 2012）ので、広島県内に居住する大学生は鹿児島方言を聞く可能性が低いと考えられるからである。なお、前述した3つの先行研究ではいずれも話し手の印象を評定する際に同一人物の録音した共通語と方言の音声刺激を使用しているが、本研究では文章刺激を使用することにした。その理由は、先述したとおり日本の方言は地域差を反映する地理的な方言であることから、個人が使用する方言はその人が育った地域で生活する中で習得されたものと考えられる。したがって、広島方言と鹿児島方言の2つの方言を同一人物が各方言を使用する地域出身者にとって不自然にならないよう発話することが難しいと考えたからである。

ところで、近年方言を使用しない若者が増えているという指摘（岡本, 2001）がある一方で、関西方言を使えたらいいと思うといった方言の使用願望をもつ若者も増えているとの指摘（渡辺・唐沢, 2013）もある。このように若者の方言の使用に関する指摘が一貫しないのは、もともと方言の使用に対して多様な捉え方があるためと考えられる。このように考えると、方言の使用に対する捉え方の違いによって、方言話者に対する印象も変化すると予想される。そこで、田中・前田（2012）の方言に対する意識の違いの類型化を参考に方言意識群を構成し、探索的に方言話者に対する印象評定値を方言意識群間で比較検討することを本研究の第2の目的とした。

## 方 法

### 実験参加者

広島県内在住の女子大学生132名が本実験に参加した。このうち、回答に不備があった者と中国・四国地方、九州地方以外の出身者を除き、128名（有効回答率97.0%）を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢は、19.59歳（ $SD = 1.19$ ）であった。

## 実施手続き

2013年5月下旬から6月中旬に授業時間の一部を使用して質問紙実験を集団で一斉実施した。また、一部の実験参加者には個別に協力を求めた。所要時間は約20分であった。実験実施にあたっては、実験の目的、実験への参加が任意であること、回答したくない項目には回答しなくてもよいこと、全体傾向について分析・検討するので個別の回答を取り上げることがないこと等を口頭および質問紙の表紙に印刷して説明した。また、回答にあたっては以下の手順で行った。はじめに、実験参加者自身について尋ねる質問（出身地、年齢等）と方言意識、および各言語スタイル（共通語、広島方言、鹿児島方言）に対する接触経験について回答してもらった。次に、3種類の言語スタイルのうち1つの言語スタイルに対するイメージと好意度を評定してもらった後、その言語スタイルで書かれた文章を提示し、話し手に対する印象を評定してもらった。さらに、残りの2種類の言語スタイルについても同様に評定してもらった。なお、共通語、広島方言、鹿児島方言の提示順序に関しては、カウンターバランスをとった。

## 実験計画と群構成

言語スタイル×実験参加者の出身地の2要因計画であり、言語スタイルは参加者内要因、実験参加者の出身地は参加者間要因であった。言語スタイルについては、話し手の使用する言語スタイルとして共通語、広島方言、鹿児島方言の3水準を設定した。実験参加者の出身地については、参加者の記述した出身地に基づいて広島県出身、広島県以外の中国・四国地方の県出身、九州地方の県出身の3水準を設定し、実験参加者をいずれかの水準に分類した。その結果、広島県出身者57名、広島県以外の中国・四国地方の県出身者35名、九州地方の県出身者36名となった。本研究での出身地は、0歳から18歳までで最も居住歴の長い都道府県とした。

## 実験材料の作成

まず、発話内容を共通語によって文章化した。町他（2006）と同様に、共通語の会話内容について、東京都出身者1名、埼玉県出身者1名、神奈川県出身者1名の計3名に表現を検討してもらった。その結果、会話内容の表現に問題はないと判定された。次に、共通語の文章と同じ内容を広島方言、鹿児島方言によって文章化した。各言語スタイルによって作成した発話内容について、広島方言話者3名に広島方言と共通語の2種類に関して以下の2点について検討してもらった。①広島方言と共通語による会話の文章が同じ内容を表現しているか。②作成した方言刺激に聞いたことのない表現、あるいは不自然な表現はないか。その結果、会話内容は類似性にも表現にも問題はないと判定された。鹿児島方言についても広島方言と同様に、3名の鹿児島方言話者に鹿児島方言と共通語の2種類に関して点検してもらった結果、問題はないと判定された。本研究で使用した刺激文を表1に示す。

## 測定内容

以下の7つの事柄について測定を行った。

1) **実験参加者の属性** 学科、学年、年齢、居住形態、出身地について回答を求めた。

2) **方言意識** 田中・前田(2012)を参考に、表2に示す6項目を使用した。各項目について、あてはまる程度を5段階で評定してもらった。得点化においては、各項目の左側の内容にあてはまると回答するほど高得点となるようにした。

3) **共通語、広島方言、鹿児島方言への接触経験** 3つの言語スタイルに対する接触経験について、「非常に聞いたことがある」、「どちらかといえば聞いたことがある」、「どちらとも言えない」、「どちらかといえば聞いたことがない」、「非常に聞いたことがない」の5段階で評定してもらった。以後の分析では、各言語スタイルに対する接触経験の得点を統制変数として使用した。

4) **共通語、広島方言、鹿児島方言に対する言語イメージ尺度** 町他(2006)が使用した「社会的望ましさ」と「情的豊かさ」の2下位尺度から構成されるイメージ尺度を使用した(表3)。表3に示す形容詞対8項目について、共通語、広島方言、鹿児島方言それぞれに対して抱いているイメージにあてはまる程度を5段階で評定してもらった。尺度得点の算出にあたっては、まず言語スタイル別に各項目の左側のイメージをもつほど高得点となるように項目得点を変換した。次いで、町他(2006)と同様に、共通語、広島方言、鹿児島方言に対する各言語イメージ尺度項目の加算平均値を算出した。その後、下位尺度ごとに $\alpha$ 係数を算出した(表3)。その結果、町他(2006)で示された $\alpha$ 係数(順に、 $\alpha = .59, .59$ )とほぼ同程度の値が得られた。そこで、共通語、広島方言、鹿児島方言それぞれについて、先行研究と同様の2下位尺度を構成し、言語スタイル別・下位尺度別に項目平均値を算出し、それらを各尺度得点とした。したがって、言語イメージ尺度の各尺度得点は1点から5点の範囲にわたる。各尺度得点が高いほど、提示された言語スタイルに対する社会的望ましさイメージあるいは情的豊かさイメージを強く抱いていることを意味する。

表1 本研究で使用した刺激文

<b>【共通語】</b> 私は今、大学3年生で心理学を勉強してるんだ。サークルは、サッカー部に入ってるよ。サッカー部は、いい人がたくさんいるし、体を動かせるから楽しいよ。よかったら一緒にやらない？今度、見に来てよ。そう言えば、あなたケーキ好きだったよね？この前、駅前のケーキ屋さんに行ったんだけど、すごくおいしかったの。今度、一緒に食べに行こうよ。ところで、次の教室どこ？
<b>【広島方言】</b> うちは今、大学3年生で心理学を勉強しとるんよ。サークルは、サッカー部に入とるんよ。サッカー部は、いい人がようけおるし、体を動かせるけえ楽しいよ。よかったら一緒にやらん？今度、見に来んさい。そう言やあ、あんたケーキ好きじゃったよね？この前、駅前のケーキ屋さんに行ったんじゃけど、ぶちうまかったよ。今度、一緒に食べに行こうや。ところで、次の教室どこなん？
<b>【鹿児島方言】</b> あたしは今、大学3年生で心理学を勉強してんだ。サークルは、サッカー部に入ってるよ。サッカー部は、よか人がずんばいおるし、体を動かせるから楽しかよ。よかったら一緒にやらんね？今度、見に来んね。そう言や、あんたはケーキが好きだったがね？こん前、駅前のケーキ屋さんに行ったけど、わっぜうまかったがよ。今度、一緒に食べに行っが。ところで、次ん教室どこけ？

**5) 各言語スタイルへの好意度** 各言語スタイルをどの程度好きか、あるいは嫌いかについて、「非常に好き（5点）」から「非常に嫌い（1点）」の5段階で評定してもらった。項目得点をそのまま尺度得点とした。

**6) 話し手に対する印象評価尺度** 町他（2006）の使用した人物評価尺度から、「人柄のよさ」「知性」「社交性」の3下位尺度について因子負荷量の高い順に3項目を選出して使用した。形容詞対9項目について、共通語、広島方言、鹿児島方言それぞれの話し手に対する印象としてあてはまる程度を5段階で評定してもらった。先述の言語イメージ尺度と同様に、各項目の左側の印象をもつほど得点が高くなるよう項目得点を変換した後、共通語、広島方言、鹿児島方言に対する各印象評価尺度項目の加算平均値を算出し、下位尺度ごとに $\alpha$ 係数を算出した（表4）。その結果、町他（2006）

表2 方言意識の項目

1. 出身地の「方言」が好き	—	嫌い
2. 家族に対して、出身地の「方言」を使う	—	使わない
3. 同じ出身地の友人に対して、出身地の「方言」を使う	—	使わない
4. 異なる出身地の友人に対して、出身地の「方言」を使う	—	使わない
5. 普段の生活において「共通語」を使っていると思う	—	思わない
6. 「方言」と「共通語」を場面によって使い分けていると思う	—	思わない

表3 言語イメージ尺度項目

<b>社会的望ましさ (<math>\alpha = .60</math>)</b>		
1.	おだやか	— 荒っぽい
2.	良いことば	— 悪いことば
3.	きつくない	— きつい
4.	きれい	— 汚い
<b>情的豊かさ (<math>\alpha = .70</math>)</b>		
5.	表現が豊か	— 表現が乏しい
6.	親しみやすい	— 親しみにくい
7.	味がある	— あじけない
8.	感情的	— 理性的

表4 話し手に対する印象評価尺度項目

<b>人柄のよさ (<math>\alpha = .85</math>)</b>		
1.	正直な	— 不正直な
2.	素直な	— 素直でない
3.	温かい	— 冷たい
<b>知性 (<math>\alpha = .87</math>)</b>		
4.	知的な	— 知的でない
5.	礼儀正しい	— 礼儀正しくない
6.	教養のある	— 教養のない
<b>社交性 (<math>\alpha = .81</math>)</b>		
7.	明るい	— 暗い
8.	社交的な	— 非社交的な
9.	積極的な	— 消極的な

で示された  $\alpha$  係数 (順に、 $\alpha = .87, .85, .73$ ) とほぼ同程度の十分な値が得られた。そこで、共通語、広島方言、鹿児島方言それぞれについて、先行研究と同様の 3 下位尺度を構成し、言語スタイル別・下位尺度別に項目平均値を算出し、それらを各尺度得点とした。したがって、印象評価尺度の各尺度得点は 1 点から 5 点の範囲にわたる。各尺度得点が高いほど、提示された刺激文の話者に対して、人柄のよさ、知性、社交性が優れているという印象をもつことを意味する。

**7) 話し手に対する対人魅力尺度** 話し手の対人魅力を測定するために町他 (2006) で使用された「1. 知り合いになりたいと思う」「2. 一緒に働きたいと思う」「3. 好きになれそうだと思う」の 3 項目から構成される対人魅力尺度を使用した。提示された刺激文の話者に対して各項目内容についてそう思う程度を「非常にそう思う (1 点)」から「非常にそう思わない (5 点)」の 5 段階で評定してもらった。イメージ尺度や印象評定尺度と同様に、3 項目の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .91$  と十分な値が得られた。そこで、言語スタイル別に 3 項目の項目平均値を算出し、それを対人魅力尺度得点とした。したがって、対人魅力尺度得点は 1 点から 5 点の範囲にわたり、得点が高いほど提示された刺激文の話者に対して対人的魅力を感じていることを意味する。

## 結 果

### 言語スタイルと出身地による話し手の印象と対人魅力の比較検討

言語スタイルと実験参加者の出身地を独立変数、3 つの言語スタイルに対するイメージと接触経験を統制変数、話し手に対する印象 (人柄のよさ、知性、社交性) と対人魅力をそれぞれ従属変数とする共分散分析を行った (表 5)。その結果、人柄のよさ得点について言語スタイルの主効果が有意であった ( $F(2, 232) = 3.92, p < .05$ )。多重比較 (以下すべて Bonferroni 法) の結果、鹿児島方言が広島方言や共通語よりも、広島方言が共通語よりも、それぞれ高かった。対人魅力得点についても言語スタイルの主効果が有意となり ( $F(2, 232) = 4.33, p < .05$ )、鹿児島方言が共通語および広島方言よりも有意に高かった。さらに、対人魅力得点については、出身地の主効果の有意傾向も認められ ( $F(2, 116) = 2.57, p < .10$ )、九州地方出身者は広島県出身者よりも対人魅力を高く評定する傾向が認められた。

### 言語スタイルと出身地による好意度と言語イメージの比較検討

町他 (2006) に倣い、好意度得点および言語スタイルに対するイメージ得点について、言語スタイルと実験参加者の出身地を独立変数、3 つの言語スタイルに対する接触経験を統制変数とする共分散分析を行った (表 6)。好意度得点については、交互作用が有意であった ( $F(4, 244) = 5.99, p < .001$ )。下位検定の結果、広島県出身者は、広島方言を鹿児島方言や共通語よりも高く、鹿児島方言を共通語よりも高く評定した。九州地方出身者は、鹿児島方言を共通語よりも高く評定した。広島方言については、広島県出身者が広島県以外の中国・四国地方出身者や九州地方出身者よりも高く評定していた。出身地の主効果の有意傾向もみられ ( $F(2, 122) = 3.07, p < .10$ )、広島県出身者が広島県以外の中国・四国地方出身者よりも高い傾向にあった。また、2 つの言語イメージ得点のう

ち社会的望ましさを得点で出身地の主効果が有意となり ( $F(2, 122) = 3.45, p < .05$ )、九州地方出身者が広島県出身者よりも有意に高かった。

表 5 言語スタイル別・出身地別の話者に関する各尺度得点の平均値 (標準偏差)

		言語スタイル		
		共通語	広島方言	鹿児島方言
人柄のよさ	広島県出身	3.64 (0.83)	3.93 (0.72)	4.02 (0.62)
	中国・四国地方出身	3.71 (0.75)	3.82 (0.70)	4.20 (0.67)
	九州地方出身	3.61 (0.81)	3.82 (0.66)	4.00 (0.58)
知性	広島県出身	3.74 (1.05)	2.42 (0.63)	2.54 (0.72)
	中国・四国地方出身	3.89 (0.89)	2.54 (0.61)	2.56 (0.68)
	九州地方出身	4.06 (0.90)	2.67 (0.73)	2.70 (0.68)
社交性	広島県出身	3.73 (0.78)	3.98 (0.70)	4.04 (0.60)
	中国・四国地方出身	3.73 (0.75)	4.14 (0.60)	4.01 (0.69)
	九州地方出身	3.62 (0.71)	4.03 (0.59)	4.12 (0.66)
対人魅力	広島県出身	3.26 (1.03)	3.61 (0.91)	3.47 (0.84)
	中国・四国地方出身	3.42 (0.75)	3.44 (0.66)	3.74 (0.59)
	九州地方出身	3.63 (0.80)	3.60 (0.94)	4.12 (0.71)

※表中の中国・四国地方出身は、広島県以外の中国・四国地方の県の出身者である。

表 6 言語スタイル別・出身地別の言語に関する各尺度得点の平均値 (標準偏差)

		言語スタイル		
		共通語	広島方言	鹿児島方言
好意度	広島県出身	3.07 (0.82)	4.18 (0.95)	3.33 (0.72)
	中国・四国地方出身	3.20 (0.63)	3.29 (0.89)	3.34 (0.68)
	九州地方出身	3.17 (0.56)	3.64 (0.96)	3.86 (0.68)
社会的望ましさ	広島県出身	3.83 (0.68)	2.29 (0.58)	2.93 (0.45)
	中国・四国地方出身	3.71 (0.75)	2.37 (0.56)	3.03 (0.46)
	九州地方出身	3.98 (0.65)	2.44 (0.53)	3.10 (0.71)
情的豊かさ	広島県出身	2.50 (0.76)	3.92 (0.58)	3.57 (0.57)
	中国・四国地方出身	2.43 (0.69)	3.57 (0.45)	3.52 (0.49)
	九州地方出身	2.48 (0.92)	3.72 (0.55)	3.78 (0.63)

※表中の中国・四国地方出身は、広島県以外の中国・四国地方の県の出身者である。

### 方言意識に基づく群構成

田中・前田 (2012) を参考に、方言意識の 6 項目 (表 2) と共通語に対する好意度の項目の計 7 項目を使用してクラスター分析を行った。その結果、田中・前田 (2012) と同様、クラスター数は 5 つが妥当と判断した。次に、各クラスターの特徴を明らかにするために、一要因分散分析により、クラスター分析に使用した 7 項目の得点をクラスター間で比較した (図 1)。その結果、すべての得点で有意差が認められた。「出身地の『方言』が好き」では ( $F(4, 123) = 8.67, p < .001$ )、第 1 クラスターが他の 4 つのクラスターよりも有意に低かった。「家族に対して、出身地の『方言』を使う」でも同様に ( $F(4, 123) = 40.25, p < .001$ )、第 1 クラスターが他の 4 つのクラスターよりも有意に低かつ



た。「同じ出身地の友人に対して、出身地の『方言』を使う』では ( $F(4,123) = 27.00, p < .001$ )、第1クラスターが他の4つのクラスターよりも有意に低く、第4クラスターが第2クラスターよりも有意に低かった。「異なる出身地の友人に対して、出身地の『方言』を使う』では ( $F(4,123) = 39.64, p < .001$ )、第1、5クラスターが第2、3、4クラスターよりも有意に低かった。「普段の生活において『共通語』を使っていると思う』では ( $F(4,123) = 19.22, p < .001$ )、第3、4クラスターが第1、2クラスターよりも有意に低く、第4クラスターが第5クラスターよりも有意に低かった。「『方言』と『共通語』を場面によって使い分けられていると思う』では ( $F(4,123) = 77.46, p < .001$ )、第1、3クラスターが第2、4、5クラスターよりも有意に低かった。「共通語が好き』では ( $F(4,123) = 2.60, p < .05$ )、第4クラスターが第5クラスターよりも有意に低かった。

以上の結果は、田中・前田 (2012) の結果と同様の傾向を示した。そのため、本研究において構成された5つのクラスターの命名においても田中・前田 (2012) を参考にした。第1クラスターは、誰に対しても、出身地の方言を使うことが少なく、方言の使い分けというよりも共通語を使っていると認識しており、共通語への好意度も比較的高いことから、「共通語話者」と命名した。第2クラスターは、家族、同郷の友人、異郷の友人のいずれに対しても出身地の方言をよく使い、共通語もよく使用している。さらに、共通語と方言の使い分け意識も高いことから、「順応派」と命名した。第3クラスターは、共通語と方言の使い分け意識が最も低いことから、「消極的使い分け派」と命名した。第4クラスターは、家族、同郷の友人、異郷の友人のいずれに対しても出身地の方言をよく使用しており、共通語を使っているという意識および共通語への好意度が最も低いことから、「積極

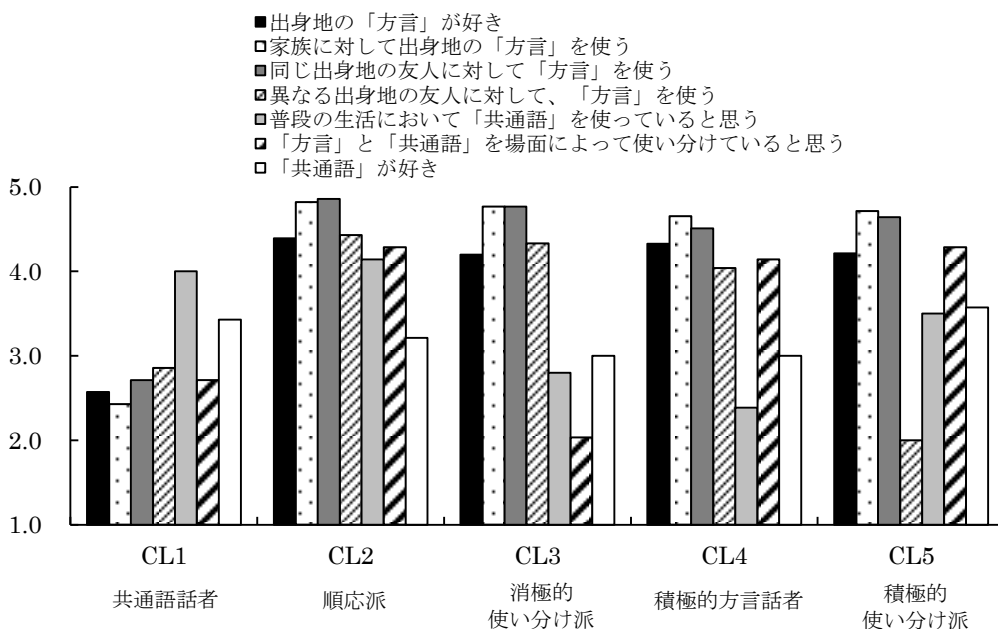


図1 各クラスター群別の方言意識に関する7項目の平均値

※図中のCLはクラスターを意味する。

的方言話者」と命名した。第5クラスターは、家族や同郷の友人には出身地の方言を使用するが、異郷の友人には方言は使わない。共通語と方言の使い分け意識が高く、共通語に対する好意度も最も高いことから、「積極的使い分け派」と命名した。

以後の分析では、これら5つのクラスターを方言意識群として群間比較を行った。各群の人数は、共通語話者群7名、順応派群28名、消極的使い分け派群30名、積極的方言話者群49名、積極的使い分け派群14名であった。各群を構成する人数に偏りがみられたが、前述のとおり5群間で方言意識に顕著な違いがみられており、方言意識による話し手の印象の違いを詳細に検討するために上述の5群間で比較を行うことにした。なお、各群別の出身地の割合（人数）は以下の通りであった。共通語話者群では、広島県出身者85.7%（6名）、広島県以外の中国地方の県出身者14.3%（1名）、九州地方の県出身者0.0%（0名）であった。順応派群では、広島県出身者50.0%（14名）、広島県以外の中国地方の県出身者28.6%（8名）、九州地方の県出身者21.4%（6名）であった。消極的使い分け派群では、広島県出身者50.0%（15名）、広島県以外の中国地方の県出身者20.0%（6名）、九州地方の県出身者30.0%（9名）であった。積極的方言話者群では、広島県出身者36.7%（18名）、広島県以外の中国地方の県出身者34.7%（17名）、九州地方の県出身者28.6%（14名）であった。積極的使い分け派群では、広島県出身者28.6%（4名）、広島県以外の中国地方の県出身者21.4%（3名）、九州地方の県出身者50.0%（7名）であった。

### 言語スタイルと方言意識群による話し手の印象と対人魅力の比較検討

言語スタイルと方言意識群を独立変数、3つの言語スタイルに対するイメージと接触経験を統制変数、話し手に対する印象と対人魅力をそれぞれ従属変数とする共分散分析を行った（表7）。その結果、人柄のよさ得点については、言語スタイルの主効果が有意となり（ $F(2, 228) = 3.77, p < .05$ ）、鹿児島方言が広島方言や共通語よりも有意に高かった。方言意識群の主効果も有意となり（ $F(4, 114) = 3.08, p < .01$ ）、順応派群が共通語話者群よりも有意に高かった。知性得点については、交互作用が有意であった（ $F(8, 228) = 3.02, p < .01$ ）。下位検定の結果、共通語に対する評定は順応派群と消極的使い分け派群が共通語話者群よりも高かった。さらに、順応派群、消極的使い分け派群、積極的方言話者群、積極的使い分け派群は、共通語を広島方言や鹿児島方言よりも高く評定していた。さらに、順応派群では鹿児島方言を広島方言よりも高く評定していた。対人魅力得点では、言語スタイルの主効果が有意となり（ $F(2, 228) = 3.90, p < .05$ ）、鹿児島方言が共通語よりも高かった。また、言語イメージの2得点について言語スタイルと方言意識群を独立変数、各言語スタイルへの接触経験を統制変数とする共分散分析を行ったが、いずれの得点でも有意差は見出されなかった（表8）。

## 考 察

本研究では次の2点を検討することを目的とした。第1の目的は、3種類の言語スタイル（共通語、広島方言、鹿児島方言）と参加者の出身地（広島県出身者、広島県以外の中国・四国地方の県出身者、九州地方出身者）による話し手の印象の違いについて先行研究から導出した次の3つの予

想を検討することであった。本研究の予想①は、共通語話者に対しては他の2つの方言の話者よりも知的得点が高い。予想②は、出身地に関わらず実験参加者が日常的に耳にすることの多い広島方言は共通語よりも社交性や親しみやすさに関する評定値が高い。予想③は、広島県内では使用される可能性の低い鹿児島方言に対する社交性や親しみやすさに関する評定値は、九州地方出身者が他の地域出身者よりも高い。また、第2の目的は、3種類の言語スタイルと方言意識による話し手の印象の違いを探索的に検討することであった。

表7 言語スタイル別・方言意識群別の話者に関する各尺度得点の平均値（標準偏差）

		言語スタイル		
		共通語	広島方言	鹿児島方言
人柄のよさ	共通語話者	3.24 (0.66)	3.19 (0.79)	3.48 (0.54)
	順応派	3.98 (0.97)	4.14 (0.72)	4.26 (0.64)
	消極的使い分け派	3.68 (0.75)	3.80 (0.58)	3.98 (0.56)
	積極的方言話者	3.53 (0.70)	3.89 (0.70)	4.11 (0.65)
	積極的使い分け派	3.60 (0.79)	3.74 (0.59)	3.98 (0.53)
知性	共通語話者	2.76 (0.53)	2.57 (0.57)	2.67 (0.58)
	順応派	4.23 (0.92)	2.38 (0.77)	2.74 (1.03)
	消極的使い分け派	3.99 (0.78)	2.58 (0.57)	2.66 (0.54)
	積極的方言話者	3.73 (0.98)	2.56 (0.68)	2.52 (0.59)
	積極的使い分け派	3.90 (1.13)	2.50 (0.58)	2.36 (0.53)
社交性	共通語話者	3.62 (0.93)	3.33 (0.88)	3.67 (0.38)
	順応派	4.02 (0.80)	4.30 (0.67)	4.20 (0.77)
	消極的使い分け派	3.61 (0.62)	3.90 (0.61)	3.97 (0.67)
	積極的方言話者	3.57 (0.76)	4.07 (0.57)	4.05 (0.62)
	積極的使い分け派	3.74 (0.69)	4.05 (0.54)	4.14 (0.34)
対人魅力	共通語話者	2.76 (0.94)	3.00 (0.61)	2.95 (0.49)
	順応派	3.55 (1.05)	3.65 (0.97)	3.67 (0.84)
	消極的使い分け派	3.47 (0.71)	3.54 (0.95)	3.68 (0.78)
	積極的方言話者	3.37 (0.90)	3.60 (0.76)	3.89 (0.78)
	積極的使い分け派	3.48 (0.93)	3.55 (0.81)	3.79 (0.67)

表8 言語スタイル別・方言意識群別の言語に関する各尺度得点の平均値（標準偏差）

		言語スタイル		
		共通語	広島方言	鹿児島方言
社会的望ましさ	共通語話者	3.46 (0.82)	2.25 (0.75)	3.29 (0.42)
	順応派	4.00 (0.65)	2.31 (0.63)	2.82 (0.49)
	消極的使い分け派	3.75 (0.65)	2.36 (0.57)	3.04 (0.54)
	積極的方言話者	3.86 (0.67)	2.40 (0.54)	3.03 (0.54)
	積極的使い分け派	3.84 (0.86)	2.32 (0.43)	3.11 (0.61)
情的豊かさ	共通語話者	3.00 (0.43)	3.68 (0.59)	3.36 (0.54)
	順応派	2.48 (0.91)	3.77 (0.67)	3.72 (0.58)
	消極的使い分け派	2.38 (0.80)	3.70 (0.55)	3.45 (0.50)
	積極的方言話者	2.46 (0.76)	3.79 (0.50)	3.67 (0.59)
	積極的使い分け派	2.46 (0.73)	3.86 (0.53)	3.70 (0.62)

第1の目的について言語スタイルと出身地を独立変数とする共分散分析を行った結果、話し手の知性評定値には統計的な有意差がみられなかった。ただし、言語スタイル別に評定値(表5)を比較すると、共通語の得点( $M=3.87$ )が広島方言( $M=2.52$ )や鹿児島方言( $M=2.59$ )よりも相対的に得点が高かった。また、言語スタイルと方言意識群を独立変数とする共分散分析では、方言意識群のうち4つの群(順応派、消極的使い分け派、積極的方言話者、積極的使い分け派)で共通語話者が広島方言や鹿児島方言の話者よりも知性得点を高く評定していた(表7)。さらに、言語スタイルの主効果の有意傾向も認められ、共通語話者に対する知性得点が広島方言や鹿児島方言の話者よりも高く評定される傾向にあった(表7)。これらの得点傾向は、先行研究(町他, 2006; 岡本, 2001; 渡辺・唐沢, 2013)の結果や本研究の予想①と一致するものといえよう。

一方、話者に関係する得点についてみると(表5)、人柄のよさでは、鹿児島方言話者が最も高く評定され、次いで広島方言話者が高く、共通語話者の得点が最も低い傾向にあった。対人魅力では、鹿児島方言話者が広島方言話者や共通語話者よりも高く評定された。つまり、人柄のよさと対人魅力の2得点では共通語話者や広島方言話者よりも鹿児島方言話者に対する評定値が高かった。この結果は、現在居住している地域で主に話されている方言であれば、参加者の出身地に関わらず好意的に評定されるとは解釈できない。したがって、本研究の予想②は支持されなかったといえよう。本研究で使用した刺激文の内容が言語スタイル間で同じであった。このことを踏まえると、実験参加者が現在居住している広島県で使用されている広島方言話者よりも、耳にする可能性が低いと考えられる鹿児島方言話者の人柄のよさや対人魅力が高く評定された理由として、方言自体の特徴が挙げられる。しかし、この点を本研究で詳細に検証することが難しい。そのため、方言の種類や特徴によって話し手の印象に違いがみられるか否かについては今後の検討が必要であろう。さらに、好意度については(表6)、広島県出身者は広島方言話者を高く評定し、九州地方出身者は鹿児島方言話者を高く評定していた。この交互作用から、出身地域あるいはその近隣で主に使用されている方言は、それ以外の方言や共通語よりも好意的に捉えられていることがわかる。したがって、この結果は予想③を支持するが、好意的な印象の形成には比較的耳にすることの多い方言であるか否かよりも、参加者の出身地で使用されている方言か否かが影響していると示唆される。

第2の目的について検討した結果(表7)、知性得点については交互作用が認められ、共通語に対して順応派群と消極的使い分け派群が共通語話者よりも高く評定していた。さらに、順応派群と消極的使い分け派群は、共通語話者を鹿児島方言話者や広島方言話者よりも高く評定していた。加えて、順応派群は共通語話者群よりも人柄のよさを有意に高く評定した。共通語話者に対して順応派群や消極的使い分け派群は、日常的に方言を使用する傾向にあることが共通している(図1)。したがって、本研究結果からは日常会話において誰に対しても方言をよく使用する者ほど、共通語話者に対して知的な印象をもち、話し手の言語スタイルに関わらず話し手に好意的な評価をする傾向があるといえよう。しかし、方言をよく使用する者がなぜ発話者に対して肯定的な印象をもつのかについては本研究からはわからない。順応派群や消極的使い分け派群のコミュニケーションの特徴や個人特性等の要因が関連している可能性が考えられるが、この関連性等については今後検討する必要があるだろう。

最後に本研究の限界と今後の課題を3点指摘する。第1に、本研究では日本の方言が地域方言であることを考慮して実験刺激を文章刺激とした。しかし、先行研究(町他, 2006; 岡本, 2001; 渡辺・唐沢, 2013)で一貫してみられている知性や親しさ、および社交性に関する言語スタイル間の違いが明確には見出されなかった。方言は通常会話の中で使用されるため、言語形態だけでなくイントネーションによって印象の違いが生じる可能性もある。このように考えると、イントネーション等の情報の含まれない文章刺激では、実験参加者が方言や共通語の話し手に対する印象を十分形成するには至らなかったのかもしれない。今後、複数の方言刺激の提示方法を音声刺激にした場合についての検討も必要であろう。第2に、実験参加者の出身地について鹿児島県出身者が少数(4名)であったことも本研究の限界として指摘できる。広島県出身者と広島県以外の中国・四国地方の出身者の群を構成したことで、出身地が地理的に近くても広島方言の話し手に対する印象に違いがあることを見出した。しかし、鹿児島県出身者と鹿児島県以外の九州地方の出身者を分けた群構成ができなかったため、広島方言と同様の結果が鹿児島方言でもみられるか否かを確認することができなかった。加えて、出身地の群構成においても町他(2006)のように厳密な基準を設定しなかったことも本研究の限界として指摘できよう。さらに、本研究では各言語スタイルの接触経験を過去の接触の程度として測定したが、接触の頻度として測定した方が適当だったのかもしれない。第3に、刺激文の内容について本研究では聞き手に語りかけるような文章を使用した。先行研究をみると、自己紹介(岡本, 2001)、初対面の人に道を尋ねる際の2者間の会話(町他, 2006)、友人との会話(町他, 2006; 渡辺・唐沢, 2013)など多様であり、話し手の性別も研究間で異なっている。聞き手が話し手に対して形成する印象は、言語スタイルだけでなく、話し手と聞き手の性別、会話等がなされる状況などによっても違いがみられると考えられる。今後は、これらの要因を組み合わせた検討も必要だろう。

## 引用文献

- 町 一誠・樋口匡貴・深田博己 (2006). 話し手の方言使用と印象 —コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響 社会心理学研究, **21**, 173-186.
- 岡本真一郎 (2001). 名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響 —Matched-guise technique を用いて 社会言語科学, **3**, 4-16.
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2012). 話者分類に基づく地域類型化の試み —全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討 国立国語研究所論集, **3**, 117-142.
- 渡辺 匠・唐沢かおり (2013). 共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討 心理学研究, **84**, 20-27.

## **Effects of dialects and participant's birthplace on the impressions of speakers**

**Naoko NIIMI** (Hiroshima Bunkyo Women's University)

and

**Yuu MARUME** (Sakoda Dental Clinic)

Effect of a speaker's language, standard-Japanese, the Hiroshima-dialect, or the Kagoshima-dialect and the birthplace of a participant, as well as the relationship between the participant's familiarity with a dialect, on impressions regarding the speaker were investigated. Results indicated the following. (1) Standard-Japanese speakers were evaluated as more intelligent than speakers of Hiroshima, or Kagoshima dialects. (2) People that speak the dialect of the participant's birthplace made a more positive impression than standard-Japanese, or other dialects. (3) People who often use dialect in their daily conversations tended to positively evaluate presented speakers' intelligence and likability.

**Key words:** use of dialect, participant's birthplace, awareness of dialect use, impression formation.